

神戸女子大学第50回コスモス祭参加

「能・狂言絵の世界」展

神戸女子大学須磨キャンパスA館 A402・A403教室

2018年11月3日(土)・4日(日) 10:00~17:00

主催：神戸女子大学古典芸能研究センター



(古典芸能研究センター蔵『〔絵入謡本〕』「松風」より)

中世芸能を代表する能・狂言は、古くから、さまざまな形で描かれてきました。16世紀末頃になると、洛外洛中図などの風俗画の中に添景として能舞台が描かれるのとは別に、能を物語絵化して楽しむための絵巻や絵本が作られるようになりました。江戸前期頃まで制作された、これら能の絵入り本は残存数が少なく、今回展示した古典芸能研究センター所蔵の『〔絵入謡本〕』(展示番号2)は、その作例の1つとして、きわめて貴重な資料です。(今秋には、この資料を中心に、神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集2『絵入謡本と能狂言絵』と題した書籍の刊行を予定しています。)

一方、江戸時代には、能・狂言の舞台の見せ場を、演者と作り物のみで1図ずつ描く、能狂言絵巻・画帖も作られるようになりました。今回は、江戸前期から近代にかけて描かれた資料数点を展示しています(展示番号6・7・9)。そのほか、能絵の萌芽とも言える室町期の謡本の表紙絵(展示番号1)、演能に深く関わる能道具図(展示番号10)、近世から近代に続く出版文化の中で生まれた能絵(展示番号3~5)、狂言のみが単独で描かれた絵画資料(展示番号11~13)などを展示しています。古典芸能研究センターが所蔵する、能・狂言絵の名品のかずかずをお楽しみください。

謡本の表紙絵

室町末期頃より、謡^{うたい}が能から独立して一般の人々に楽しまれるようになると、金銀泥絵の表紙を持つ豪華な装訂の謡本が作られるようになりました。そうした謡本の表紙絵は、曲に無関係な植物や風景などの絵を描いたものと、曲に関係する絵を描いたものの二種類に大別できます。今回展示した堀池宗叱謡本の表紙絵は後者に該当し、植物・楽器・風景・人物など、能にちなんださまざまな絵が、金銀泥の絵具を使って描かれています。曲のイメージを象徴的に描いたそれらの表紙絵は、能の絵画化の早い時期の作例として注目されます。

1 堀池宗叱謡本

折本 47帖
室町末期頃写

永禄から文禄期（1558～1596）に活躍した、京都の手猿楽者（素人の能役者）・堀池宗叱の謡本。室町期の謡本には珍しい折本仕立てで、表裏がともに表紙となっている。折本の各帖の両面に1番ずつ、全94曲を収め、もとは50帖100番の揃本であつたとみられる。表紙には紺地に金銀泥で曲にちなんだ景物・事物・人物が描かれ、左肩に金銀泥絵入朱題簽もしくは朱無地題簽が貼られる。第1帖目の表紙に貼付された極めによると、金銀泥絵入朱題簽は近衛前久^{このえさきひさ}（号 龍山）筆、朱色無地題簽は後奈良院皇子曼殊院覚恕^{まんじゆいんかくじよ}筆となり、龍山筆は慶長期（1596～1615）のものと認定される。94曲中23曲の巻末に、「堀池宗叱（花押）」の署名が記され、第4冊「安宅」、第5冊「采女」「松風村雨」の欄外には本文注記の書き入れがある。

伊藤正義文庫蔵

能の絵入り本

能の物語を絵画とともに鑑賞するという現象は、室町後期頃から流行した御伽草子や幸若舞曲などの文芸作品の絵入り本化の一環として広まったとされています。能の絵入り本や絵巻は16世紀末頃より現れ始め、その殆どが謡曲の詞章そのままの詞^{ことばがき}書と、鮮やかな彩色が施された挿絵の組み合わせでできています。いわゆる奈良絵風の物語絵を収めた、それらの能の絵本・絵巻は稀少で、国内・海外をあわせて、これまでに約20点の伝存が知られているにすぎません。能の絵入り本・絵巻は室町末期頃から江戸前期頃まで作られましたが、江戸中期以降、じょじょに姿を消していきます。

ちなみに奈良絵とは、室町後期頃から江戸前期頃にかけて描かれた絵入り彩色写本（奈良絵本）の挿絵を指します。明治以降の呼称で、なぜ「奈良」がつくのかはよくわかっていません。

2 〔絵入謡本〕*

紙本著色・墨書 列帖装 半紙本 12帖
江戸前期頃写

紺色紙に金砂子切箔散し金泥霞引草木模様入表紙。大きさは縦寸法が少し異なるA・Bの2種類に分かれる。左肩に曲名を墨書した題簽が貼付され、内題はない。観世流の詞書（詞章）が鳥の子紙に原則片面7行で書かれる。書体は全帖一筆とみられ、題簽も同筆である。本文の右方に役名表記があり、「詞・カ・ル・一セイ・サシ・上歌・ロンギ・クセ・ワカ・キリ」および「上・中・下」などの節付け記号が付されるが、ゴマ点はない。木箱の蓋裏に「大正十三甲子七月十日／前田家於本郷邸内御弘道具ノ／節求之」の墨書があり、もとは前田侯爵家旧蔵だったものが大正13年（1924）に売り立てられたことが知られる。各帖に、いわ

ゆる奈良絵風の彩色絵による挿絵が1図から4図載るが、もとは1帖あたり4図（「橋弁慶」のみ3図）の挿絵が施されていたとみられ、全帖で11箇所¹¹の絵が抜かれている。1帖1曲を収め、全12曲。

奈良絵本に分類される能の絵本・絵巻のうち、『[絵入謡本]』と同じ、元は揃い本だったと推測される豪華本は特に希少で、東洋文庫（岩崎文庫）蔵「観世流謡本 絵入六番」6冊を含め、3種類程度しか知られていない。これらの絵入謡本の成立時期は江戸前期頃と考えられており、『[絵入謡本]』も概ねこの頃に制作されたと推測される。『[絵入謡本]』の挿絵は、能のストーリーを絵画化した物語絵をベースにしながらも、所々に実際の能の演出を反映させた描写を組み合わせているという、一見アンバランスな構成でできている。そうした手法は、『[絵入謡本]』を、舞台のエッセンスを取り込みつつ、能の物語を視覚的に把握できる読み物にするための工夫だと思われる。

所収曲：養老・道盛・きよつね（清経）・三輪・松風・あこき（阿漕）・あふひの上（葵上）・盛久・ありとをし（蟻通）・邯鄲・橋弁慶・殺生石

* [] は、資料に書名などの情報がない場合に整理する側が独自に判断してつけた名称、という意味をあらわす。

演能図絵巻・画帖

江戸時代に入ると、1図に1曲の上演場面を描いた、能・狂言絵が現れ始めます。原則として、能・狂言を演じる立ち方^{たちかた}の役者のみが緻密に描かれ、作り物をのぞき能舞台などの背景は一切描かれません。それらの絵は、絵巻、画帖、貼交屏風など、さまざまな体裁で伝わっており、多くの場合、能絵と狂言絵を交互に並べて収めていますが、能絵のみや狂言絵のみを集めたものもあります。能・狂言の舞台の見せ場を描く、こうした絵画形式は、江戸時代に1つのスタイルとして定着し、数多くの作品が制作されました。

また、これら演能図とも称すべき能・狂言絵の多くが、特定の粉本^{ふんぽん}をもとに制作され、特に江戸前期に制作された作品に、よく似た構図の絵が多いことが知られています。粉本による伝統的な手法で制作されることの多かった演能図ですが、江戸中期以降になると、絵師独自の図様によって描かれた能・狂言絵も作られるようになります。

3 謡曲画誌

袋綴 半紙本 1冊

中村三近子編著 橋守国画

享保20年（1735） 大坂 毛利田庄太郎刊

『謡曲画誌』巻2・3・5・6・9・10と、『謡曲画誌』の改題本である『謡訓蒙図会』^{うたいきんもうずえ}巻1・4を、1冊に合綴したもの。巻7・8は欠。『謡曲画誌』は、全50曲の謡曲の概説書。初番目物から五番目物の曲を1冊あたり5曲選び、各曲の解説を挿絵とともに収録する。解説は、曲のあらすじ、関連する和漢の故事・伝承、登場人物の批評など、啓蒙教訓的な内容が中心である。挿絵は1曲あたり2図を収め、能の物語を写實的に絵画化したものが大半であるが、ところどころ能の舞台となった名所絵も含まれる。『謡曲画誌』は改題本（『謡訓蒙図会』）も含め、京・大坂・江戸で版を重ねた。江戸時代に本格的な能の物語絵が教訓絵本の挿絵のために描き下ろされ、刊本として広く普及した点が注目される。

編著者の中村三近子（なかむらさんきんし）は、寛文11年～寛保元年（1671～1741）、京都の儒学者・神道家。山崎闇斎に学び、多数の啓蒙教訓書を著述した。橋守国（たちばなもりくに）は、延宝7年～寛延元年（1679～1748）、大坂の絵師。狩野探幽の弟子で禁裏御用絵師をつとめた鶴沢探山に学び、多くの絵本を出版した。

伊藤正義文庫蔵

4 旧幕府御大礼之節 町人御能拝見之図

大判 木版彩色刷（錦絵） 3枚続

揚洲周延画

明治22年（1889） 神田江川八左衛門刊

『温故東之花』全7篇のうち第3篇。江戸城における町入能の様子を描いた錦絵。江戸時代に將軍宣下など幕府の慶事があると、本丸大広間前の表舞台において祝賀能が催された。催しが1日のみの場合はその当日に、数日間にわたる場合はその初日に、江戸の町人の参観が特別に許され、これを町入能と称した。袴を着けた5000余名の町人が朝と昼の2組に分かれ、表舞台の脇正面の白州の上に、敷物なしでしゃがんで観劇した。天候に関わらず入場の時に雨傘が1本、退場の時に菓子や酒が下賜されるのが慣例となっており、町人は野次を飛ばすなど無礼講に近い状態で見物した。本絵でも、町人たちが傘を片手に喧噪の中で観劇している様子が描かれている。舞台上の演目は《翁》であり、番組の冒頭に演じられる祝言曲である。

伊藤正義文庫蔵

5 青山仮皇居御能図

大判 木版彩色刷（錦絵） 3枚続

揚洲周延画

明治11年（1878） 浅草綱島亀吉刊

明治11年7月5日に青山大宮御所能舞台で催された舞台披き能の錦絵。青山大宮御所の能舞台は、能楽愛好者であった英 照皇太后のために新設され、舞台披き当日は、《翁》を皮切りに能5番・狂言4番が交互に上演された。本絵は、そのうち第8番目（能の第4番目）に演じられた《正 尊》の舞台の様子を描く。絵の中央で顔を後ろに向けて座る男性は、明治天皇である。

シテを勤めた観世流の初世梅若実^{うめわか}は、シテ方宝生流^{ほうしやう}16世宗家の宝 生九郎^{ほうしやう}、金春流シテ方の桜間伴馬^{さくらまばんま}とともに明治の三名人とうたわれるほどの実力者であり、青山大宮御所に能舞台が設けられた際には御能御用達の一人に任命された。当時は、明治維新の打撃により衰退の危機を迎えていた能楽界が、政府の保護策や皇室・旧大名の後援などにより、徐々に復活へ向けて歩み始めていた時期であり、青山大宮御所における能舞台の造営も、能楽復興に大きく貢献したとされる。

伊藤正義文庫蔵

楊洲周延（ようしゅううちかのぶ）

天保9年～大正元年（1838～1912）。幕末・明治時代の浮世絵師。本名、橋本直義。もと越後高田藩士で、歌川国芳、3代目歌川豊国、豊原国周に師事。幕末維新时期には、旧幕派の一員として彰義隊に加わった後、函館戦争にも参戦した。明治期に入ると、洋装した新時代の女性の風俗を描く一方、江戸幕府や大奥の年中行事や風俗など懐古的な作品も手がけ、人気浮世絵師として活躍した。江戸時代の風俗を題材とした錦絵の揃い物に、『温故東之花』（明治21年～同23年〔1888～1890〕刊）、『千代田之大奥』（明治27年～同29年刊）、『千代田之御表』（明治30年刊）などがある。ちなみに錦絵とは、浮世絵の多色摺木版画をいう。

6 能画絵巻

紙本著色・墨書 卷子本 1軸

福王雪岑筆 江戸中期

能と狂言の彩色絵18図が交互に描かれた絵巻。絵巻の末尾に「雪岑筆（朱印）」の落款がある。全6紙。各絵図の左上に、すべて一筆で曲名が墨書されている。冒頭の「千歳」に始まり、10曲の能絵と7曲の狂言絵を収め、能絵は五番立の曲順に基づいて描かれている。最後に「呉服」を置くのは祝言能として扱ったためであろう。下段の『能狂言画卷』ともども、上品かつ繊細な筆致で、各曲の見せ場が描かれている。

所収曲：千歳・白楽天・鼻取すまふ（鼻取相撲）・俊成忠則・くさひら（茸）・松風・歌仙・道成寺 金春流・ゑさし十王（餌差十王）・富士太鼓・花子・羅生門・こんふうり（昆布売）・三輪・宗八・烏帽子折・絃上・呉服

伊藤正義文庫蔵

7 能狂言画卷

紙本著色 卷子本 1軸

福王雪岑筆 明和9年（1772）

能と狂言の彩色絵13図が交互に描かれた絵巻。全6紙。絵巻の末尾に「右一軸/行年七十二歳雪岑筆（朱印）（朱印）」の落款があり、明和9年（1772）の雪岑72歳の時の作品。冒頭の《三番叟》に続き、上演の一場面を描いた6曲の能絵と5曲の狂言絵が収められており、能は五番立の曲順にそって並べられている。最後に《金札》が置かれるのは、祝言能として扱われたためとみられる。なお、能・狂言絵を制作するための粉本を集成した『能楽図譜』（法政大学能楽研究所蔵）に、雪岑が82歳の時に描いた《金札》の演能図の写しが収められており、この絵巻の同曲の絵と同じポーズをとった後シテが描かれている。

所収曲：三番叟・老松・福の神・田村・猿座頭・祇王・政頼・道成寺・枕物狂・土蜘蛛・仏師・咸陽宮・金札

8 相生松図

紙本墨書 軸装1幅

福王雪岑筆 江戸中期

福王雪岑が描いた相生の松の絵。絵の上部には、宝暦4年（1754）元旦に15世観世大夫元章もとあきらによって書かれた小謡《四海波》の詞章が貼付されている。おそらくは、《四海波》の詞章を記した料紙を元章から贈られた雪岑が、その内容に合わせて相生の松を描き、贈られた料紙を絵の上部に貼り付けたのであろう。小謡《四海波》は能《高砂》の前場の一節で、波風のない穏やかな天下泰平の世を賛美する内容。祝儀の場でよく謡われる。相生の松は、永遠に続く平和の象徴として、《四海波》の詞章にも見える。観世座付きのワキ方福王流の家元である雪岑は、江戸城の演能において頻繁に元章と共演しており、寛延3年（1750）の50歳の時には、元章が江戸神田筋違橋門外で催した大規模な勧進能のうち、13番の演目に出演している。

伊藤正義文庫蔵

福王雪岑（ふくおうせっしん）

元禄14年～天明5年（1701～1785）。江戸中期の能楽師・絵師。雪岑は、ワキ方福王流9世茂右衛門盛勝（もえもんもりかつ）の画号。絵を英一蝶（*）に学び、能・狂言を題材とした絵をよく描いたほか、俳諧本の挿絵も手がけた。福王流（福王家）は、流祖の盛忠（慶長11年〔1606〕86歳没）以来、観世座との結びつきが強く、4世盛厚の死没によって家系が途絶えると、9世観世大夫黒雪こくせつの弟、服部栖元せいげんの子が跡を継ぎ、以後、代々観世座付のワキ方として、幕府の扶持を受けて活躍した。家元の

立場でありながら、絵師としても本格的に活動した雪岑は、歴代の中でも異色の経歴の持ち主と言える。
なお、雪岑のほかに、白鳳軒の画号も持つ。

*英一蝶（はなぶさいちょう） 承応元年～享保9年（1652～1724）。江戸前中期の絵師。京都生まれ。早くに江戸に移り狩野派に学ぶも、まもなく破門され、多賀朝湖の画名で洒落な風俗画を描いた。元禄11（1698）、幕府の怒りをかい三宅島へ流罪となるが、11年後に恩赦となり英一蝶と改名した。また、俳諧に親しみ、松尾芭蕉に師事、芭蕉高弟の其角とも交流を深めた。

9 能楽図

絹本著色 卷子本 1軸

円山応震筆 江戸後期

能と狂言の彩色絵10図が描かれた絵巻。冒頭の「翁」に続き、上演の一場面を描いた能5曲と狂言5曲の絵を収める。全10切で、1切あたり1図を描く。見返しが目次となっており、橋掛りの絵の上部に所収曲が朱筆で記され、能の曲順は五番立となっている。見返しの目次と、この絵巻の曲順が異なることから、現在の並びは本来のものではなく、後代に誤った順番で接ぎ直されたものとみられる。

円山応震（まるやまおうしん）（寛政2年～天保9年 [1790～1838] *）は、江戸後期の京都の絵師で、円山応挙の孫。応挙の次男の子として生まれるが、後に応挙の長男で円山派2代目の円山応瑞の養子となり、円山派3代目となった。

所収曲：翁・田村・千鳥・花子・末広・高砂・野宮・融・小鍛冶・福神

*円山応震の没年は、天保11年（1840）とする説もある。

10 能面図巻

紙本著色 卷子本 1軸

孝頂 慶応2年（1866）

能面25点の絵を、およそ老体面、女体面、男体面、異相面の順に並べた絵巻。12紙継。各能面の上部に面の名称が墨書され、能面ごとに彩色に関する注記が書き込まれている。筆者の孝頂については未詳。なお、奥書には、「慶応二年寅仲春 面数廿八 孝頂写」とあり、本来28面の能面の絵が収められていたはずだが、冒頭が欠損しているため、3面分の絵がなくなっている。

所収面：三光・曲見・翁・小面・増・中将・邯鄲男・渴喰・平太・猩々・獅子口・山姥・童子・瘦女・〔般若*〕・泥眼・瘦男・悪尉・怪士・天神・一角仙人・大癡見・長霊癡見・黒髭・釣眼

*般若のみ面の名称が記されていない。

伊藤正義文庫蔵

伊藤正義文庫について

伊藤正義文庫は、古典芸能研究センターが所蔵する初代古典芸能研究センター長 故伊藤正義本学名誉教授（平成4～15年度在職、図書館長・文学部長・副学長等を歴任、平成21年没）の旧蔵書です。能楽研究および中世文学研究の第一人者であった旧蔵者が収集した2万点を超える書籍と資料は、専門領域に留まらず、歴史・思想などの周縁にも及びます。書籍（和書・洋装本・雑誌）の全容は、古典芸能研究センターホームページ内「蔵書検索」の「電子版和書目録」「洋装本検索」「逐次刊行物検索」でそれぞれ確認することができます。

狂言絵

中世に形成され能とともに発展した狂言は、絵画の世界においても能とともに描かれる場合が多くあります。しかし、狂言のみを対象とした絵画も江戸初期から現れ始めました。現在確認できる最も古い肉筆の狂言絵は、慶長（1596～1615）頃の制作とされる「古能楽図」（国立能楽堂蔵）に描かれた狂言《井杭》の絵図だと考えられています。

一方、印刷技術の発達により、江戸初期の万治3年（1660）には狂言台本集の『絵入狂言記』が刊行され、そこに描かれた挿絵が、印刷された最も古い狂言絵となります。江戸時代の狂言絵は、歌舞伎を描いた絵画のように多くは制作されず、能絵に比べても伝来する作品の数も限られています。しかし、なかには、英一蝶や葛飾北斎によって、独特で個性的な作品も描かれました。

江戸末期になると、狂言を写生した絵が描かれるようになり、その流れを受け継いだ明治期の狂言絵も、絵師の体験や実見に基づいた写実的な作品が中心となりました。それらの狂言絵は、絵師の自由な発想によって多種多様な描写で制作され、従来の狂言絵に比べ、より狂言らしい楽しさに満ちた、いきいきとしたものに発展していきます。

11 絵入狂言記

袋綴 半紙本 5巻5冊
寛文5年（1665）3月 板木源左衛門刊

『狂言記』とは、江戸時代に唯一出版された狂言台本集の総称。『狂言記』には、『絵入狂言記』（万治3年〔1660〕初刊）、『新版絵入狂言記外五十番』（元禄13年〔1700〕初刊）、『絵入続狂言記』（同年初刊）、『絵入狂言記拾遺』（享保15年〔1730〕初刊）の4種があり、いずれも5巻5冊で50番ずつ、計200番の台本を収録する。大蔵流・鷺流・和泉流の統制下でない、いわゆる群小狂言役者の台本を集めて成立したと推測されている。展示は、『絵入狂言記』（万治3年〔1660〕初刊）から11番のみを抄出し、2巻2冊の形で寛文5年（1665）3月に出版したものを、さらに同時期に5巻5冊に分けて出版したもの。『狂言記』の挿絵は、すべて狂言が上演されている舞台の様子を描いており、展示の『絵入狂言記』も同様である。ただし、万治3年刊本からは挿絵が改変されている。

伊藤正義文庫蔵

12 能画図式

袋綴 半紙本 1冊
河鍋曉斎画
明治20年（1887） 東京吉田金兵衛刊

狂言画の絵本。『能画図式』の初版は慶応3年（1867）で、もとは乾坤2冊に分けて出版された。明治20年に再刊された本書は、慶応3年刊本のうち、乾冊の末尾8曲と坤冊の全64曲を合わせた計72曲の狂言画が収められている。本書は、慶応3年刊本とは一部で曲の掲載順が入れ替わっており、彩色も異なるが、再刊の経緯については不明。狂言の舞台の一場面が、写実的でありながらユーモラスな筆致で描かれ、現在の漫画のようにセリフの一部も記されている。

伊藤正義文庫蔵

河鍋曉斎（かわなべきょうさい）

天保2～明治22年（1831～1889）。江戸・東京在住の日本画家・浮世絵師。少年時代より江戸幕府の表絵師をつとめる駿河台狩野家で修行し、独立後は風刺精神にあふれる狂画（滑稽な絵）、浮世絵、

錦絵などを描いた。暁斎は、絵師の修業時代から大蔵流分家で宝生座付の8世大蔵弥太夫虎重に狂言を習い、素人ながら相当な技量の持ち主であったらしい。暁斎は多数の能・狂言絵を遺したが、能楽への深い造詣と卓抜した画力に裏付けられたそれらの絵画は、役者の躍動感と狂言の持つ滑稽味にあふれ、幕末・明治に描かれた、さまざまな能・狂言絵の中でも、とりわけ異彩を放っている。

13 狸腹鼓

紙本著色 1枚

大正2年(1913) 玉手菊洲筆

狂言《狸腹鼓》の彩色絵。「九々翁 菊洲(印)」と署名のあることから、大正2年(1913)、菊洲81歳の時の作品。《狸腹鼓》は、狸が尼に化け、狸狩りをしようとする獺師の殺生を戒めるが、正体を暴かれ腹鼓をして命乞いをするという内容。この絵は、正体がばれた狸が、獺師の求めるまま早変わりして尼から狸の姿に戻り、腹鼓を打つ場面を描く。ただし、獺師の髪型が茶筌髷であることから、実際の舞台そのままの描写ではなく、菊洲の想像によるアレンジが加えられていると考えられる。また、絵の背景には、うっそうとした薄と藁屋根のついた門が描かれるが、和泉流三宅派(通称《加賀狸》)では、藁屋の門・柴垣・菊・薄などの作り物を出すことから、この演出を参考にしたのかもしれない。

伊藤正義文庫蔵

玉手菊洲(たまてきくしゅう)

天保4年～大正3年(1833～1914)。幕末・明治の能絵師。大坂生まれ。父の玉手棠^{とうしゅう} 洲は、江戸後期から幕末にかけて活躍した絵師で、能絵もよくした。兄の玉手梅^{ばいしゅう} 洲も絵師で、菊洲と同じく能を題材とした絵を好んで描いた。大坂時代の菊洲は金剛流に親しみ、能絵も同流を題材に描いたという。明治15年(1882)の東京移住後は、明治時代を代表する雑誌『能楽』の裏表紙絵を、明治35年(1902)7月の創刊号から大正元年(1912)12月まで64回担当し、裏表紙1画面につき狂言1曲を10年にわたって描き続けた。奔放で飄逸な画風を特徴とする。



〈平成30年秋刊行予定〉
神戶女子大学古典芸能研究センター研究資料集2
『絵入謡本と能狂言絵』(思文閣出版)

神戶女子大学第50回コスモス祭参加 「能・狂言絵の世界」展図録

2018年11月3日発行

〔編集・発行〕神戶女子大学古典芸能研究センター
(展示担当：長田あかね)

〒650-0004 神戸市中央区中山手通2丁目23-1

神戶女子大学教育センター2階